
半月

一宮 集

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

半月

【Nコード】

N5599H

【作者名】

一宮 集

【あらすじ】

オーシャン・ビューのレストラン、ギャルソンの微笑、空に浮かぶ半月。メイン・ディッシュと結婚指輪を前にしたわたしの心は、何故か、遠い場所にあった

眼下に広がる海。

オーシャン・ビュウのレストランで。

ぼんやりと、渡された指輪を眺めていた。

これが、わたしの望んだ結末なのか。

そんなことを、一人思いながら。

都つてさ、意外と好き嫌い多くね？

向かいの席の、若い男が囁いてくる。

下卑た笑みを浮かべながら。

どうして呼び捨てなのよ？ と、わたしは思う。

この五年間。

あの人は一度も、そんな風にわたしを呼んだことはないのに。

いつも、都ちゃん、と、呼んでくれるのに。

決して育ちのいい人じゃないけど。

いつも、わたしのことを大切にしてくれたのに。

うちのおふくろ、そういうのうるせえからよ。ま、とりあえず話合わせておいて。

嬉しそうな彼に引き換え。

わたしはまるで、死んだ魚のよう。

笑わないことすら、相手は気にせず。

自分ひとりで喋ってる。
それもまあ、いつものこと。

てゆーか、ぶっちゃけ式とかめんどうくせーんだけど。親孝行
だと思って、我慢してくれよ。

ふと見ると。

天空には、ほの白い半月が浮かんでいる。
丁度、あの人の奥さんのお腹のようにも。
何かの頭骨のようにも見えた。

” 都ちゃんの好きにして。俺には、引き止める権利なんかないから。
”

あの人はいつも、そう言ってくれる。
上司だった頃からずっと。

誰にも言えない恋に気付いたのは、二十四の春。
あの人はすでに、四十を過ぎていて。

仕事の出来る人でも、話の上手い人でもない。

何処にでもいる、普通の人だった。

それなのに。

何故だろう。

そんな普通のおじさんに。

どうしようもなく、惹かれてしまったのは。

お前の家って、借家だろう？ あんなの引き払ってさ、うち来ればいいんだよ。

お前って何？ と。

また、わたしは思う。

あの人は、こんなに年の離れたわたしを、いつも”あなた”と呼んでくれたのに。

人知れずつく溜息を、知ってか知らずか。

背の高いウエイターが、メイン・ディッシュを運んでくる。

お金のかかった微笑みを浮かべながら。

二年前。

苦しくて、悲しくて。

あの人を何度も困らせた。

一緒になりたいと。

隠れて会うのは嫌だと詰め寄って。

ありもしない可能性を確かめて。

出来もしない約束をさせようとした。

どうせ遊びなんでしょう？

これまでの三年、返してよ！

どれだけ付き合っても、どんなに好きになっても。

結局、何処へも行けないんだから！

泣き叫ぶわたしを置いて。

あの方は一度、車を出したけど。

すぐに、戻ってきてくれた。

わたしを、きつく抱き締めるために。

”…ごめん。判ってる。卑怯なことしてるのも。辛い目に遭わせてるのも。”

あの人の涙を。

その時、初めて見た。

”でも…離したくないよ。離れたくない。俺の我儘かもしれないけれど。”

その言葉に。

わたしはやはり、負けてしまつて。

あの人を抱き締めながら、思わず、天を仰いだ。

そう言えば。

初めて、二人で泣いた夜も。

奥さんが妊娠したと告げられた夜も。

こんな、半月が出ていた。

嘲笑いもせず、慰めもせず。

月は、そこに浮かんでいるだけ。

その眩い光を。

いつか、叩き落としてやりたいと思った。

それ、超すごくね？ ヤフオクで買ったんだけど。定価十五万だから。

指輪の箱を閉めながら。

わたしはちらつと顔を上げ。

気の進まないまま、微かに頷く。

それで彼は満足なのだ。

あの人への当てつけに、去年から付き合い始めた男。

三流大学出の、茶髪の営業マン。

そのことを報告した時。

おめでとうとは、言われなかったけれど。

もう、連絡は取らないよと。

あの方は、寂しそうに笑って。

こう、付け加えた。

前から、何度も反芻していたように。

” 都ちゃんが幸せなら、俺はいいんだ。今の俺には、あなたを幸せには出来ないから。 ”

この五年間。

あの人から貰った言葉は、今も全部残っていて。

何かの折に、ふと甦ってくる。

裏切られたのに。

捨てられたのに。

それでも、あの人のが忘れられなくて。

今は、顔を合わせても、挨拶程度の関係なのに。

それでもいいから。

あの人傍にいたいと思っていた一年間。

来月、初めての子供が生まれると知りながら。

あの人奥さんを、殺してやりたいと思う自分。

あの人に愛されて、決して手放されない存在を。

滅茶苦茶にしてやりたいと思う自分がある。

それもまた、わたしが背負う現実の一つ。

味なんか、まるで判らないまま。

最後のデザートが出る。

能天気な男は、わたしの不機嫌にすら気付かない。
週に何度か寝さえすれば、モノさえ与えておけば。
所有権があるとでも思っているのだろう。

あ、そうそう。結婚したら、仕事辞めてくれよな。

え？

三流メーカーの、しかも一般職だろう？ 要らねーじゃん、別に。俺が食わせてやっから。

……。

やね？
寿退社。一戸建て住まいの専業主婦。いいじゃん。女の夢じ

わたしはついに、彼の顔を凝視する。

お調子者で、楽天的で。

単純で、怒りっぽくて。

でも、悪い人じゃない。

けれど。

何故だろう。

どうしても、この人を好きになれなくて。

この人と、一生連れ添っていく気がしなくて。

彼との未来を、想像することすら出来ない。思うに。

わたしが求めているのは、彼ではなくて。他の誰でもなくて。

安定した生活ではなくて。

祝福される結婚ではなくて。

もつとずつと、胸を熱くするもので。

知らず、涙がこぼれるようなもの。

上手く説明出来ないけど。

この場所では、何かが違っていて。

何かが、根本的に足りていない。

それに気付いた時。

バッグを胸に抱き、席を立っていた。

…帰る。

彼は、きよとんとしてわたしを見上げるけれど。

指輪はそのまま置いていく。

仕方がない。

あとで、説明しなくては。

暮れかかる空の下。

高速道路に乗り、床までアクセルを踏み込んだ。

夕焼けの向こうに光る半月。

臨月の腹を思わせるそれに。

わたしは迷わずナイフを突き立てる。
胸の下から、陰毛の上まで真っ直ぐに。
溢れる羊水の中にいる生き物の。
半分は、あの人の。
残り半分は、見知らぬ女のもの。
あの月と同じように。
赤子は、眠っているだろうか。
それとも、起きているだろうか。
わたしには、関係ないけれど。

あの人に会わなければ。
一刻も早く。
その一心で、わたしは車を飛ばす。
でなければ。
わたしは本当にやってしまいそうだ。
あの人と半分と、妻と呼ばれる女の半分。
小さな塊を引きずり出して。
真っ二つに切り裂いてしまいたい。
あの半月のように。
それから、ばらばらに切り刻んでしまいたい。
あの人を恋しがる、物欲しげなこの心と共に。
それが二度と生き返らないように。
誰からも、目を背けられるように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5599h/>

半月

2010年10月13日06時40分発行